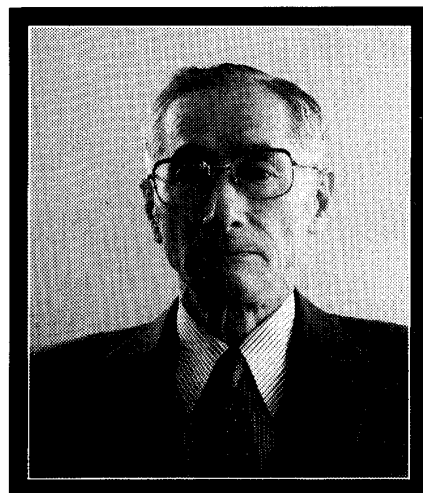


元会長 名誉会員

最上武雄先生のご逝去をいたむ

本学会名誉会員で元会長最上武雄先生は昭和62年12月15日日赤医療センターで、肺性心という珍しい病気で突然逝去されました。1911年3月14日のお生れですから数え年で喜寿ということになります。

先生は昭和9年3月に東京帝国大学工学部土木工学科を卒業され、10年講師、11年助教授、22年教授となられ、評議員を経て43年4月から11月まで学園紛争の大変な時期に工学部長をつとめられ、46年に退職され、名誉教授の称号を授与されました。続いて46年日本大学理工学部教授に就任され、56年まで10年間勤務されました。この間、戦後からなくなれるまで攻玉社短大にも関係されました。先生は約半世紀にわたって土質基礎工学の研究と教育に盡されました。直接間接に教えを受けた学生は数千人に達し、これら教えを受けた人達は斯界において大いに活躍しているところであります。



研究の面では応用力学、土質力学、基礎工学の理論的な面において多くの業績を挙げられました。初期においては弾性論や乾燥砂の運動機構の研究をされましたが、その後、土の動力学、粒状体の力学等に関する研究論文を数多く発表され、土質基礎工学に多大の貢献をされました。25年福井地震の際に砂の液状化が地盤の破壊、ひいては構造物被害の原因になっていることを指摘され、28年の第3回国際土質基礎工学会議で発表されました。これが現在土質工学の重要な分野である土質動力学のもとになっていることは国際的にもよく知られているところです。

昭和23年頃早くも土質力学の同好会的な集まりをつくられ、それが23年の第2回国際土質基礎工学会議に論文を送る際の母体となり、さらにこの集まりが日本土質基礎工学委員会、後に土質工学会へと発展したわけではありますが、この間常に指導的役割を果たされました。38～40年には土質工学会会長、44～48年には国際土質基礎工学会のアジア地域の副会長をつとめられました。日本の技術的成果を世界に発表すべきであると主張され、40年に英文論文集、Soils and Foundations の発刊のため尽力されました。今日の日本の土質の技術が世界的にも認められるようになっているのは先生のおかげであるといっても過言ではないと思います。

先生は、土木学会会長、建設機械化協会会長、ウェルポイント協会会長をつとめられ、土質工学だけではなく、広く土木一般の技術の向上にも力をつくされました。政府、地方公共団体、業界方面でのご活躍も著しいものがありました。主なものを挙げると次のようです。学術奨励審議会委員、大学設置審議会委員、日本学術会議会員、建設技術開発会議会員、技術士試験委員、東京都地盤対策審議会委員等。

先生は19年に土木学会賞、43年に土質工学会賞、51年に紫授褒賞を受けられ、さらに57年には勲二等瑞宝章が授与されました。

先生は10年程前に重い喘息にかかられましたが「歩け歩け療法」と強固な意志の力で見事に病気を克服されました。ところが昨62年8月頃軽い病気で入院されましたが、今日の進んだ医学でも十分解明されていない病気のため、最高の医療と夫人の手厚い看護を受けられたにもかかわらず遂におなくなりになりました。「私のような老人よりも若い人の病気を治して下さい」と医者に言っておられたと聞きましたが、正に先生らしいと思いました。先生は深い学識と高い能力をもっておられるにもかかわらず、何事にも控え目で若い者の立場をよく理解され、常によい相談相手になって下さいました。土質工学会のボスになることを好まれず、若い者の力に信頼を置かれたために、学会は和気あいあいの中に大きな発展を遂げました。今後は大所高所からご指導願いたいと思っていましたのに急逝されました。会員と共に謹しんでご冥福をお祈りいたします。

(東京理科大学教授 福岡正巳)

社団法人 土質工学会